

慶應言語学コロキウム

【生成文法の哲学的意義 2】

言語使用の創造性と私的・公的言語： デカルト派言語学とウィットゲンシュタインのパラ ドックス

講師：阿部 潤 氏 (元東北学院大学文学部教授)

日時：2016年3月19日(土)・20日(日)13:00-18:30

会場：慶應義塾大学三田キャンパス北館3階大会議室

参加費無料 申込不要

本セミナーでは、まず Chomsky (1966) の *Cartesian Linguistics* を取り上げることによって、生成文法の概念的枠組が西洋哲学史の中にどのように位置づけられるのかを考察する。デカルトが着目した「言語使用の創造性 (creativity of language use)」を出発点として、「言語は思考の反映である」というテーゼを掲げて言語を考察したポール・ロワイヤル学派やフンボルトを中心に、生成文法の概念的枠組の基礎を成すと考えられる哲学的主張を追っていく。その中で、とりわけ、初期の生成文法が「深層構造」を仮定した哲学的意味を考えていきたい。また、Chomsky (1986) の *Knowledge of Language* の第1、2、4章を取り上げることによって、まず研究対象としての「言語」をどのように考えるのか、いわゆる「公的言語 (public language)」なるものを实在物とみなすのは妥当かを考察する。そして、生成文法が採用する言語の内在的アプローチに向けられたパラドックス、すなわち「私的言語 (private language) なるものは存在するのか」という懐疑的問いに対して、チョムスキーがいかに反論を加えているのかを見ていく。

※ *Cartesian Linguistics*, *Knowledge of Language* を持参することをお勧めする

主催：慶應義塾大学言語文化研究所
協力：慶應義塾大学次世代研究プロジェクト B

<お問い合わせ先>

〒108-8345 港区三田 2-15-45 慶應義塾大学言語文化研究所
電話：03-5427-1595 (事務室直通) メール：genbu@icl.keio.ac.jp
<http://www.icl.keio.ac.jp>